

視察1 トスカーナ州 アグリツーリズモ 「Vecchio Maneggio」

1. 視察日程等

- 日 時 2019年10月14日(火)
- 視察先 Vecchio Maneggio
- 対応者 ティツィアーナ・ピエラッチーニ氏
アデレ・カンパネッラ氏(生パスタづくり)
- 概要

Vecchio Maneggioはティツィアーナ氏が生まれ育った家である。ティツィアーナ氏は結婚して20年間、家を出て暮らしていたが、その家が朽ちていくのを目の当たりにし、地元に戻ってアグリツーリズモを始めることを決意。1998年から準備を始め、2001年春に開業。現在、夫、息子夫婦、9名の従業員で経営。ワイン、オリーブオイル、ハチミツ、サフランを生産し、宿泊、レストラン、乗馬、料理レッスンなどを行っている。(今回の研修では生パスタづくりを体験)



2. 研修内容

1970年代まで、田舎の農家は非常に貧しく、若者は町を出ていき、高齢化が進み、担い手不足の問題があった。それらの問題を解決する方法として、農家の人たちが自分達の家を開放し、外の人を入れることにより所得を増やそうということで1980年代に始まった制度がアグリツーリズモである。

トスカーナでアグリツーリズモを始めると世界中から観光客がやってきたが、



農家は年配者が多く、英語が話せないという問題が起こった。しかしながら、自分達の子供や町から出て行った若者は学校で英語を学んでいたため、地元に戻ればアグリツーリ

ズモの仕事がある、またその手伝いができるということで、次第に若者が戻ってくるようになった。そして、色々な経験を積み、世界的な目を持った若者が帰ってくることにより、自分達が作ったワインなどの生産品を世界に発信しようという動きが起こった。

初めは外国の人をアグリツーリズムに呼ぼうというインプットの動き、それから、自分達の生産品を世界に広げようというアウトプットの動き、農家の働き方は変わってきているが、良い方向に進んでいると思う。

イタリア全土にアグリツーリズムという制度はあるが、トスカーナのアグリツーリズムは非常に人気が高い。トスカーナのアグリツーリズムには州政府が決めた非常に厳しい規則がある。中でも1番重要な規則は、アグリツーリズムで出す食事は自分達で作ったもの、もしくはトスカーナ州で作られたもの、つまりはトスカーナの素材だけを出しなさいというものである。他の地域では、自分達の州以外のものをスーパーで買って来て出すようなところもある中、やっている本人達からすると厳しい決まりではあるが、「本当のアグリツーリズムだ」とイタリアの中でも高い評価を得ている。

他にも色々と規則はあるが、1980年代にアグリツーリズムの制度ができた時よりも年々厳しくなっている。食事の他に重要視されるのは、衛生面である。部屋は綺麗に保たれているか、掃除をしっかりとしているか、キッチンは清潔にしているかなど、もともとは農家の家であるため、昔はそれほど綺麗なものではなかったが、州政府からは問題が起こらないように五つ星ホテル並みの清潔さを求められ、そういった面では大変さを感じる。

アグリツーリズムは農業所得向上のための制度であるため、農業が主であり、農業に加えて観光業という考え方である。よって、観光業所得は農業所得を超えてはいけないという決まりがある。ただし、アグリツーリズムはあくまでも農家の人達を助ける、農業を活性化させるための制度であるため、2つの特例がある。一つは、15キロメートル四方にレストランなどの飲食店がない場合、もう一つ

は、農業の所得の方が少ないけれども明らかに労働時間は多い場合である。

アグリツーリズムを始めるにあたっては、まずは町に申請書を提出する。農家であり農民がいる、犯歴が無い、マフィアとの関係は無い、裁判中のものは無いなどの書類が必要である。町での審査が終わると州に申請される。その時に初めて担当部署から職員が来て、建物や外観は大丈夫か、規則に則っているかなどの確認を行う。その後、保健所の確認が入り、全ての審査が通るとアグリツーリズムを始めることができる。最初の申請から許可まで、6ヶ月から8ヶ月かかる。始めるにあたりヨーロッパ共同体から30%の支援金を受けることができるが、許可が下りてからしか受けとることができないため、開業の準備を始めても途中で資金が無くなり諦めざるを得なくなり、氣力を失う者が出てくることもある。よって支援金は最初に受け取りたいというのが希望である。



ホテルには星の数でランクを表す制度がある。アグリツーリズムでも同じようにひまわりの数でランクを表している。過去には州によって違う標記をしていたが、最近は農林省がランク付けを行うことで統一された。ただし、ホテルでは高級感によりポイントが付くが、アグリツーリズムは、建物が昔ながらのものを保っているか、レストランでは土地のものを出しているか、サービスは土地のものに根付いているかなどを評価して付けられる。

○質疑応答

Q 1. 立ち上げ当初に30%の支援金があったということであるが、それ以降に改修などが必要になった際には支援があるのか。

A 1. 最初の30%以外には何もない。最初の30%についても見積額での30%であるため、実際にかかった費用の30%には満たなかった。

Q 2. 30%の支援金は建物に対してだけか。

A 2. 農業が主であるため、建物だけではなく、農機具を購入すればそういったものも含めて、全ての 30%である。

Q 3. 漁業者が行うペスカツーリズムがあると聞いたが、ペスカツーリズムとアグリツーリズムは同時にできるものか。

A 3. イタリアでは農夫と漁師という分け方ではなく、土地や海から物を収穫する人というカテゴリーがあり、漁師でも申請すれば同じライセンスでペスカツーリズムとアグリツーリズムができる。

Q 4. 農夫であり農家登録をすることや、観光業収入が農業収入を超えてはいけないなどの規則は、制度が始まった 1980 年代からあるものか。それ以降、変わってきたことはないか。

A 4. 観光業収入が農業収入を超えてはいけないという規則は最初からあった。15 キロメートル四方にレストランなどの飲食店がない場合、また農業収入の方が少ないけれども労働時間は明らかに多い場合は、農業収入の方が少なくてもよいという例外は後からできた。あくまでも地域活性化、人の流れができるように、色々な対策は後からできているが、農業が主であるという基本的な考えは最初から一貫してある。

Q 5. 日本では、作付面積や出荷量に応じて交付金が出るが、オリーブやブドウにはそういった援助はあるか。

A 5. 面積によって国から援助は出るが、年々少なくなっており、ここでは 400 ユーロ位である。しかし、400 ユーロを貰う為に、様々な書類を用意し、多くの人にサインをもらう必要があり、その諸経費が 800 ユーロ位かかるので貰わない。一応、制度としてはあるが、当てにしない。数年前までは有機栽培農家に対しての援助があったが、今は無くなった。

Q 6. アグリツーリズムをやっている農家は増えているか、減っているか。

A 6. 他地域のことをあまり知らないのですが、はっきり分からないが、アグリツーリズムを始めようとする人は数年前より減ってきて、少し落ち着いたように思う。

Q 7. 今後は更なる所得向上を目指すのか、現状維持でよいのか。

A 7. アグリツーリズムに限ったことではなく、物事に対して今のままで良いと

思ったら、それ以上は広がらない。現状維持ではなく常に更なる発展のために色々やっていきたい。その方法の一つとして、現在はワインの製造所が離れているが、このアグリツーリズム内にワインの製造所をつくって、ワインをつくる工程を見せるなど、ワインと観光を絡めたワインツーリズムをやりたい。製造所をつくるには60万ユーロ位かかるだろうが、一気にではなく、色々な方法で銀行からの借入を活用して整備していきたい。

また、料理教室もこころしい料理教室にもっと磨きをかけたい。宿泊施設を無くして、料理教室やワインツーリズムなど、レストラン業を中心にしたいと思っている。

宿泊施設を持つと夜も管理が必要になるため大変であり、それに対する収益は少ない。よって違う方法で収入を得ようと考えている。

3. 所感

最初はマンマであるティツィアーナ氏が一人で始めたアグリツーリズムであるが、現在は夫や息子夫婦の他、9名の従業員が働いている。家族の理解はもちろんのこと、ティツィアーナ氏の気持ちや情熱に賛同する人が一緒に働いているからこそ、繁忙期には常に予約でいっぱいとなるアグリツーリズムになっている。



昔からの建物と農業を行うための土地があったことがアグリツーリズムを始めるきっかけであったが、施設の整備等にそれなりの経費もかかったと思われ、30%の支援があったとはいえ、簡単に始められることではなかったと思う。しかしながら、ティツィアーナ氏は支援に過剰な期待をすることなく、3年をかけて体制を整え、思いの詰まったアグリツーリズムを始めたように感じられた。日本でも農家に対して様々な支援があるが、農家の方々が「支援があることが当然」と思っているように感じることも多々あり、支援に対する期待に大きな差があるように思う。

日本でも農村の過疎化、高齢化、農業の担い手不足は深刻である。ティツィアーナ氏と同じように多額の費用を投じて何かを始めることには様々なハードルがある。しかしながら、その問題を解決しよう、自分の故郷を守ろうとする強い思いが自分自身を動かし、人に思いが伝わることにより、人を動かすのではないだろうか。そして、その思いや活動がその土地に「また来たい」と思わせているのだろう。人の思いが人を動かし、成功に導くのだと改めて感じた。